

# 大学アウトリーチの現状と課題 ～UtoIでの活動を基にして～

東京大学大学院 理学系研究科 博士課程2年 加村啓一郎  
科学技術インタープリター養成プログラム 1期生

指導教員：佐倉統

## 目次

0	要旨	3
1	序論	4
1.1	目的	4
1.2	背景	4
1.3	方法	5
2	本論	6
2.1	課題：東京大学内のアウトリーチ活動の現状と課題の把握	6
2.2	対策：イベントポータルサイトの作成	10
2.3	比較：先行事例へのインタビュー	13
3	結論	18
3.1	ポータルサイトの評価	18
3.2	まとめ	19
4	巻末記	20

## 0 要旨

近年、大学におけるアウトリーチ活動が盛んになり、東京大学においても多くの部局にアウトリーチ活動を専門に扱う組織が設置されている。しかし、各組織間での連携はほとんどおこなわれていない。そこで、筆者は当プログラム受講生 2 名と共に、東京大学内のアウトリーチ活動を全学的に推進する組織「東京大学アウトリーチイニシアティブ (以下、UtoI)」を設立した。本論文では、UtoI の活動実績を報告することによって、大学におけるアウトリーチ活動の現状と課題を把握すると共に、その改善策を提案した。

まずは、学内のアウトリーチ活動関係者を一同に介したUtoI研究会を実施し、東京大学内のアウトリーチ活動の現状と課題の把握を試みた。その結果、以下 3 つの課題が明らかになった。1. アウトリーチ活動への理解、支援の増大 2. 学外への広報、調整の増強 3. 学内連携の強化。次に、UtoI研究会で明らかとなった課題への対策として、東京大学内のアウトリーチ活動をまとめたポータルサイトを作成した。アウトリーチ活動の実施者が各種イベント情報をUtoIのサイトに入力し、その情報を一般の参加希望者が自分の興味に応じて検索できるよう、デザイン、システムの面から工夫をおこなった。最後に、UtoIの活動を先行事例と比較するために、先行事例実施者 (MIT Outreach Database、Stanford University Office of Science Outreach) へのインタビューをE-mailにておこなった。

以上の活動の結果から、アウトリーチ活動への理解、支援の増大への改善策として、まずはUtoIに対する東京大学本部の理解増進を、学外への広報、調整の増強への改善策として、UtoIとして学外の対象者への広報を増強することを、学内連携の強化への改善策として、UtoIをきっかけとしたノウハウの共有や、リソースの共有を提案した。この研究結果を活用しながら、今後もポータルサイトの継続・発展を目指し、大学におけるアウトリーチ活動の推進に貢献できることを願っている。

## 1 序論

### 1.1 目的

本論文では大学におけるアウトリーチ活動の現状と課題を把握し、改善策を提案することを大きな目的とする。

実際には、後述する東京大学アウトリーチイニシアティブ（以下、UtoI）の活動を主たる研究対象とする。また、本研究で得られた成果を UtoI の活動にフィードバックすることを最終的なアウトプットとする。

### 1.2 背景

#### ・大学におけるアウトリーチ活動

近年、大学におけるアウトリーチ活動が盛んになってきている。ここでいうアウトリーチ活動とは、「研究者自らが研究活動、成果を社会へ公開する活動」を指す。具体的な活動としては、研究室見学や講演会など主に参加者が研究者のもとに出向くものや、出張授業、サイエンスカフェなど主に研究者が参加者のもとに出向くものなどがある。この分け方は必ずしも正確ではなく、活動の場所や形態は様々であり一律に分類することは難しいが、一般的な共通事項としては、参加者と研究者の間で双方向的なコミュニケーションをおこなうということがあげられる。平成 16 年版の科学技術白書においても「今後、科学者が社会的責任を果たす上で求められるのは、(中略) 双方向的なコミュニケーションを実現するアウトリーチ (outreach) 活動である」と謳われており、今後ますます大学におけるアウトリーチ活動は盛んになると考えられる。

#### ・東京大学のアウトリーチ活動組織

筆者の所属する東京大学内においても同じく、アウトリーチ活動は盛んとなり、多くの部局においてアウトリーチ活動を専門に扱う組織が設置されてきている。例えば、本郷キャンパスにおいては、理学系研究科の広報室や工学系研究科の広報室、地震研究所のアウトリーチ推進室などが積極的な活動をおこなっている。また、駒場キャンパスにおいても、生産技術研究所の SNG プロジェクトや総合文化研究科の下に科学技術インタープリター養成プログラムが設置されている。しかし、これらの組織はそれぞれ独立した活動をおこなっており、各組織間での連携はほとんどおこなわれてこなかった。

#### ・UtoI の設置

増加するアウトリーチ活動の要請に対し、東京大学内の各部局が独立して活動する状況は、資源や情報の共有という面でアウトリーチ活動の実施者にとって非効率であると共に、アウトリーチ活動の受け手にとっても情報が散漫しており非効率である。そこで、筆者ならびに、当プログラム 1 期生の住田朋久と 2 期生林洋平の 3 名は、アウトリーチ

活動を推進する全学組織を東京大学内に設置することが必要であると考えた。2007年11月に実施された「東京大学創立130周年記念事業 学生企画コンテスト」において、この組織の設置を提案したところ、優秀賞を受賞し、200万円の資金援助（優秀賞3件に対して総額600万円）を基に東京大学の事業として実施することとなった。本組織は名称を「東京大学アウトリーチイニシアティブ（University of Tokyo Outreach Initiative）」とし、略称を「UtoI」とした。（なお、UtoI設置までの経緯は2期生林洋平の修了論文に詳細が記述されている）

- ・ UtoI の活動

本論文では、UtoI の活動実績を報告することによって、大学におけるアウトリーチ活動の現状と課題を把握すると共に、その改善策を提案する。

### 1. 3 方法

研究方法は大きく3つに分けられる。

- ・ 課題：東京大学内のアウトリーチ活動の現状と課題の把握

まずは、東京大学内のアウトリーチ活動の現状と課題の把握を試みた。上述の学生企画コンテスト応募時点で、既にある程度の現状と課題を実感しており、その改善策としてUtoIの設置を提案したのだが、実際にUtoIの活動を実施するには、より包括的かつ詳細な現状と課題の把握が必要であった。そこで、学内のアウトリーチ活動関係者を一同に介したUtoI研究会を実施した。UtoI研究会参加者には、アウトリーチ活動の現状と課題を挙げていただいた。

- ・ 対策：イベントポータルサイトの作成

次に、UtoI研究会で明らかとなった課題への対策として、東京大学内のアウトリーチ活動をまとめたポータルサイトの作成を試みた。

- ・ 比較：先行事例へのインタビュー

最後に、UtoIの活動を先行事例と比較するために、先行事例実施者へのインタビューをおこなった。インタビュー先はMIT Outreach Database、Stanford University Office of Science Outreachの2件。方法はE-mailにておこなった。

## 2 本論

### 2. 1 課題：東京大学内のアウトリーチ活動の現状と課題の把握

東京大学内のアウトリーチ活動の現状と課題を把握するために、学内のアウトリーチ関係者を集め、UtoI研究会を実施した。

第1回 UtoI 研究会実施概要は、以下の開催通知の通りである。

(以下、開催通知)

平成20年3月3日

事務連絡

アウトリーチ活動に関心のある学内関係者の皆様

本部学生支援グループ

創立130周年記念学生企画コンテスト優秀賞受賞企画

UtoI(東京大学アウトリーチイニシアティブ)研究会の開催について(通知)

標記について、下記により開催しますので、アウトリーチ活動及びその振興に関心のある学内関係者は御出席くださるようお願いいたします。

なお、UtoI(東京大学アウトリーチイニシアティブ)は、平成19年12月に創立130周年記念学生企画コンテストにおいて優秀賞を受賞し、本学事業として正式に実施を支援することとなった企画です。

#### 記

1. 日 時 平成20年3月12日(水) 16時～18時
2. 場 所 学生部会議室(安田講堂4階)
3. 参加費 無料
4. 申込み ①氏名②所属③アウトリーチ活動の経験の有無などを明記の上、UtoI事務局までメールでお申込み下さい。
5. 内 容 報告  
(1) 理学系研究科・理学部での取組み 横山広美(准教授)  
(2) 地震研究所での取組み 辻宏道(准教授)  
(3) UtoIメンバーのこれまでの取組み  
討論

(※) アウトリーチとは、「研究者と国民が互いに対話しながら、国民のニーズを研究者が共有するための双方向コミュニケーション活動」(第3期科学技術基本計画)を意味します。

UtoIでは、研究者(学生を含む)が直接一般の人々に出会う活動を中心に組み立てていきたいと考えています。詳しくは、添付資料をご参照下さい。

○ UtoI(東京大学アウトリーチイニシアティブ) 企画者

林 洋平 (総合文化研究科博士課程2年)

加村 啓一郎 (理学系研究科博士課程1年)

住田 朋久 (総合文化研究科修士課程2年)

○ 学生企画コンテスト表彰式の様子(学内広報No. 1368より)

<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou/1368/tokusyuu.htm#toku2>

#### 【お問い合わせ先】

UtoI 事務局 E-MAIL : [UtoI@adm.u-tokyo.ac.jp](mailto:UtoI@adm.u-tokyo.ac.jp)

学生企画コンテスト事務局 E-MAIL : [gakuseiseikatsu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp](mailto:gakuseiseikatsu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp)

(本部学生支援グループ) TEL : 5841-2513 (内線 22513)

(以上、開催通知)

#### ・ 開催通知方法

以下4点の方法で通知した。

(1) 学内の各研究科総務事務へ通知し、各教員へ配布する。

(2) 学内学生向けのHPの「在学生向けお知らせ」にWEBアップ

[http://www.u-tokyo.ac.jp/index/m00\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/index/m00_j.html)

(3) 学生企画コンテストを所掌している学生生活委員会の委員にメールで周知

(4) 企画者や理学部広報室等の関係部署に直接、メールで周知

(1) (2) (3) は本部学生支援グループより、(4) は林、住田、加村より通知した。

#### ・ 参加者は11部局から24名が集まった。

参加者の所属と役職は以下の通り。開催通知に記名されている報告者2名および企画者3名を除き、プライバシー保護のため、名前は伏せる。

所属	役職（身分）
理学系研究科	地球惑星科学専攻 博士1年
理学系研究科	地球惑星科学専攻 修士1年
サステナビリティ学連携研究機構	学術研究支援員
医学系研究科	修士2年
医科学研究科	技術室 技術専門職員
医科学研究科	所長企画室 技術専門職員
物性研究所	博士研究員
宇宙線研究所	広報担当
(財)東京大学新聞社	理学部地球惑星物理学科（進学内定） 編集部員
(財)東京大学新聞社	教養学部総合社会科学科（進学内定） 編集部員
法学政治学研究科	法曹養成専攻 法科大学院2年
理学系研究科	化学専攻 博士3年
産学連携本部	事業化推進部 特任准教授
地震研究所（予定）	助教（予定）
総合文化研究科	広域科学専攻広域システム科学系 修士2年
科学技術インタープリター養成プログラム	特任助教
理学系研究科・理学部	広報・科学コミュニケーション 准教授 横山広美
地震研究所	アウトリーチ推進室 准教授 辻宏道
総合文化研究科	博士2年 林洋平
総合文化研究科	修士2年 住田朋久
理学系研究科	博士1年 加村啓一郎
他、本部学生支援グループより 職員3名	

・参加者への質問項目

参加者には研究会参加にあたって、次の2点の質問にメールで回答していただいた。

1. アウトリーチ活動を行うにあたって現在抱えている問題点。
2. UtoIに期待すること。

寄せられた回答を分析した結果、大きく3つのカテゴリーにわけることができた。

- ・アウトリーチ活動への理解、支援
- ・学外への広報、調整
- ・学内の連携



・ 回答内容

1. アウトリーチ活動を行うにあたって現在抱えている問題点

【アウトリーチ活動への理解、支援】

- ・ アウトリーチの重要性や活動そのものに対する理解を持っている研究者が現状まだまだ少ない
- ・ 活動に対する議論や評価法が数値化されていない部分が多く、客観性に欠け曖昧になっている
- ・ 教育活動と混同している人が多い
- ・ 学生がアウトリーチ活動をすることに対して否定的な意見を持っている教官がいる点。
- ・ アウトリーチを行うための道具や機会を作るための予算が少ない
- ・ 自分自身が関わっている活動では、以下の点が問題となっています。  
継続性（設立当時のメンバーが離れた後の運営が難しい）  
予算、場所の問題

【学外への広報、調整】

- ・ 広報活動が十分にできない。
- ・ 医科学研究所の感染症研究に関する公開セミナー「ラブラボ」を過去3回開催しましたが、回を重ねるごとに参加者数が減少している。おそらく同様の企画が近年増えてきて参加者の奪い合いになっているのだと思う。
- ・ 公開セミナー参加者の中の希望者を対象に、公開セミナーの翌々日に研究室見学会を開催している。セミナー当日だと希望者が多くなりすぎて対応不可能になるが、日を改めると参加者が減りすぎる。研究室見学に適当な人数にする調整が難しい。
- ・ アウトリーチ活動が、一般の人々へ届いていないという問題。具体的には、サイエンスカフェなどのイベントに参加している人々の多くが、関係者ないし専門知識を持っている人々になり、イベントが単なる内輪の集まりになってしまっている例が見受けられます。

2. UtoIに期待すること

【アウトリーチ活動への理解、支援】

- ・ 研究者へのアウトリーチ活動に対する理解の増進
- ・ 部局主催のアウトリーチ活動に対して、東京大学から助成金などの支援をしていただけるような制度を作って欲しい。
- ・ 研究者の負担を減らし、かつアウトリーチが研究者にとっても有意義なものになるようにすること

### 【学外への広報、調整】

- ・例えば出前授業を受け入れてくれる学校を紹介してくれるなどの、アウトリーチ活動の場の斡旋
- ・広報活動を支援して欲しい。

### 【学内の連携】

- ・領域を横断したアウトリーチ活動が行えるように、各アウトリーチ団体や個人を結びつける活動
- ・東大では、学内・学外でさまざまなアウトリーチ活動が行われていますが、主体の数が多すぎて、アウトリーチ活動を行っている人たち同士がばらばらに活動している印象があります。
- ・東京大学では、アウトリーチ活動に力を入れている部局が増えていますが、一般の人をひきつける求心力はまだそれほど大きくないと感じます。UtoIの方々には、東大のアウトリーチ活動がもっと一般の人にオープンになるべく、各部局のアウトリーチ活動をつなぐ核になって欲しいと感じています。
- ・分野横断的なアウトリーチ

上記回答結果ならびに、UtoI研究会における討論により、東京大学内のアウトリーチ活動の現状が明らかになると同時に、それらに対応する3つの課題が明らかになった。

#### 3つの課題

- ・アウトリーチ活動への理解、支援の増大
- ・学外への広報、調整の増強
- ・学内連携の強化

## 2. 2 対策：イベントポータルサイトの作成

UtoI 研究会で明らかになった3つの課題の解決策として、東京大学内で実施されているアウトリーチ活動のイベントポータルサイトを作成することにした。

#### 目的：3つの課題の解決

- ・アウトリーチ活動への理解、支援の増大

今まで部局ごとに個別におこなわれていたアウトリーチ活動を1つのサイトにまとめることによって、まずは東京大学内で既に多くのアウトリーチ活動が実施されていることを学内に周知することができる。

- ・学外への広報、調整の増強

今までは各部局ごとで広報をおこなっていたため、小さな部局では広報への負担が大きく、また参加者にとっても各部局のサイトを探すことは困難であった。しかし、東京大学として1つのサイトを立ち上げることによって、実施者、参加者双方が結びつきやすくなる。

- ・学内連携の強化

ポータルサイト上で実施者が一覧できるようになり、他の実施者の活動状況を容易に知って活動の参考にしたり、ノウハウの共有などを目的とした実施者同士の交流の場を構築できる。

## 概要

- ・期間：2008年3月～6月（構想）、2008年6月～2009年2月（作成）
- ・方法：web作成会社、デザイン作成会社へ外注
  - web作成会社：株式会社フューチャリズムワークス (<http://www.futurism.ws/>)
  - デザイン作成会社：株式会社 梁プランニング (<http://www.ryo-net.co.jp/>)
- ・費用：1,603,875円
- ・URL：<http://www.utoi.jp/>

## コンセプト

ポータルサイトは、例えばレストラン検索サイトである「ぐるナビ」のような場をイメージした。ぐるナビでは、レストランの情報をレストランのスタッフがぐるナビのサイトに入力し、その情報を一般の消費者が自分の好みに沿って検索するというかたちをとっている。UtoIのポータルサイトにおいても、アウトリーチ活動の実施者が各種イベント情報をUtoIのサイトに入力し、その情報を一般の参加希望者が自分の興味に応じて検索できるというものである。

ポータルサイトにおける各関係者の位置づけは以下のようになる。

- ・アウトリーチ活動実施者： **editor**（イベント情報の編集）
- ・UtoI運営者： **administrator**（ポータルサイトの管理、維持）
- ・一般の参加希望者： **viewer**（イベント情報の検索、閲覧）

## ターゲットの設定

ポータルサイトの **viewer** はアウトリーチ活動の対象者に等しく、広く一般を対象とすることになる。しかし、対象が曖昧であると、サイト作成時におけるコンセプトやサイト作成後の広報戦略までもが曖昧になる。そこで、ターゲットの設定をおこなった。UtoIのポータルサイトは高校生およびその教員、保護者をメインターゲットとした。高校生をター

ゲットとした理由は、既に東京大学内で実施されているアウトリーチ活動の多くが高校生を対象としているからである。また、高校生のみならずその教員や保護者までもをターゲットとした理由としては、高校生の年代においては自ら探索することよりも教員や保護者から情報を得ることが多く、参加の可否の判断においても教員や保護者が関わることが多いからである。

#### デザインコンセプト

高校生をメインターゲットにしたことから、今までの大学の HP にはないような親しみやすさのあるデザインを目指した。トップページは東京大学の本郷キャンパスを宝島に見立てたデザインとなっている。東京大学が、高校生にとってさまざまな知的興奮を味わえる「宝島」であることを願い、このようなデザインとした。地図上にあるそれぞれの建物をクリックすると後述する各ページに飛ぶことができる。また、隠された宝箱をクリックすると、イベント情報のページに飛ぶことができる。

#### システムコンセプト

##### ・タグによる検索

各種イベント情報を自分の興味にそって見つけることができるように、後述する様々なカテゴリーのタグによって検索できるようにした。これにより、**viewer** にとってのポータルサイトの使いやすさを目指した。

##### ・ブログ形式による入力

サイトのコンテンツ管理システム (CMS) には **Movable Type** を使用した。これにより **administrator** が各 **editor** を容易に管理できると同時に、ブログ形式で各イベント情報を編集できることから、**editor** にとっての使いやすさを高めることができた。

#### サイト構成

##### ・トップページ :

前述したデザインコンセプトのもと、まずは **viewer** を惹きつけ、楽しんでもらうことを目的とした。各ページへのリンクと共に、新着のニュースとイベント情報もページ下部に表示される。

##### ・UtoI へようこそ :

初めて訪れた **viewer** のために、UtoI の web サイトの概要、使い方を示している。

##### ・UtoI について :

UtoI 設立の経緯を解説している。

##### ・UtoI パートナー :

サイトの **editor** となっているアウトリーチ活動の実施者を「UtoI パートナー」と位置づけ、このページ UtoI パートナーを紹介している。UtoI パートナーの詳細は後述。

・ニュース :

UtoI パートナーからのニュースやコラムを掲示している。ニュースは分野のカテゴリーもしくはフリーワードでの検索が可能である。

・イベント :

UtoI パートナーが実施するイベントを紹介している。本ポータルサイトのメインページとなる。Viewer はフリーワード、ならびに以下の5つのカテゴリーにそって自分の興味イベントを探索できる。

\*開催日

\*開催曜日

\*分野 (法学、医学、工学、文学、理学、農学、経済学、教養学、教育学、薬学、その他)

\*開催場所 (本郷、駒場、柏、その他)

\*対象 (小学生、中学生、高校生、一般)

・メールマガジン :

UtoI からの情報をメールマガジンとして登録者に送付できる。

## UtoI パートナー

2009年3月3日現在で、10組織に UtoI パートナーとして参加していただいている。

### 【研究科】

- ・ 理学系研究科
- ・ 工学系研究科
- ・ 情報理工学系研究科

- ・ 地震研究所
- ・ 宇宙線研究所

### 【機構】

- ・ 海洋アライアンス

### 【研究所】

- ・ 生産技術研究所
- ・ 医科学研究所

### 【学生団体】

- ・ 法科大学院・出張教室
- ・ 理学系研究科・OtoI

UtoI パートナーとなるには、照会できる教職員が1名必要となるが、それ以外の制限は特に設けていない。UtoI パートナーには editor 権限のある独自のユーザー名とパスワードがそれぞれ配布される。

UtoI パートナーは今後も継続して募集・追加していく予定である。

## 2. 3 比較：先行事例へのインタビュー

今回の UtoI の試みを比較分析するために、先行事例の探索をおこなった。

・国内

web 上での探索およびサイエンスコミュニケーション関係者数名への簡易的なインタ

ビュー（2008年サイエンスアゴラにて、対面形式）をした結果、大学組織として活動を推進している例は国内では見当たらなかった。

・海外

欧米での活動は日本と比較して先進的であり（「国際協力によるアウトリーチ活動のためのテキストとデータベースの開発」平成18年度 研究者情報発信活動推進モデル事業採択課題（室伏きみ子・お茶の水女子大学）、UtoIと同様のイベント情報ポータルサイトを開設している大学もある。以下に具体例を2点示す。

・ Stanford University Office of Science Outreach (<http://oso.stanford.edu/>)

・ MIT outreach database (<http://mitpsc.mit.edu/outreach/>)

MITのサイトは、UtoIのサイト作成時に、サイト構造や検索カテゴリーの設定などにおいて逐次参考にした。

UtoIのサイトの評価、および今後の方向性決定の参考のために、上記2例の実施者にインタビューをおこなった。

方法：E-mailにて（各サイトの連絡先に書かれていたアドレスに送付した）

送付日：2009年2月16日

質問項目は、基本項目5問と、結論にて後述するUtoIの喫緊の課題である広報についての質問1問を送付した。

\* Q1: How and why did your website start?

（webサイト開設の経緯は？）

\* Q2: What kinds of effects you had on outreach activities in your university after opening your website?

（webサイト開設後、大学内でのアウトリーチ活動にどのような効果があったか？）

注：メール送付後に英語の文法間違いに気付いたが、ここでは原文をそのまま載せる。

\* Q3: How do you evaluate these effects? (Is it possible to quantify these effects?)

（それらの効果の評価方法は？（効果を数値化することは可能か？））

\* Q4: What are your problems for your website or outreach activities in your university now?

（webサイトもしくは大学内のアウトリーチ活動において現在抱えている問題は？）

\* Q5: How are you going to address these problems?

(それらの問題をどのように解決していく予定か?)

広報について

\* Q6: How did you let intended viewers know your website?

(対象者に対してどのように web サイトの告知をおこなったか?)

Stanford University Office of Science Outreach からの回答

回答日 : 2009 年 2 月 16 日

回答者 : Ms. Kaye Storm (Office of Science Outreach, Director)

\*A1:

The Office was created in 2003 and the website was developed just after that, although we have added more features and many more programs since then. The site was created to be a portal leading to all the science outreach activities and programs on campus, what we call a "one stop shop."

We hope it makes it easier for K-12 teachers and students and the public to find what they are looking for on Stanford's massive website.

\*A2:

It's difficult to measure that since the opening of the office happened almost simultaneously to the launch of the website. The website is just a communications vehicle; what we are more interested in measuring is how helpful the office is to Stanford faculty: How many research grants were awarded to science, engineering and medicine faculty who sought help from the office staff in designing their outreach component.

This may be helpful background information:

Stanford's Office of Science Outreach was created in May 2003, to assist faculty in the development of their science outreach activities, i.e., efforts to help increase interest and proficiency in science, math, and engineering among K-14 students, their teachers, and the general public. The Office was established for two reasons: first, because Stanford shared the concerns of the federal government about declines in interest and proficiency of America's youth in science, math, and engineering; and

second, because several federal R&D funding agencies had begun to require science outreach to achieve a broader impact as a condition of their research support to universities. Stanford faculty were concerned about their inability to comply with such requirements. Indeed, Stanford had not been awarded any new NSF Center grants during the previous decade in spite of many proposals submitted, due, they believed, to inadequate programs to achieve broader impacts contained in their proposals.

Since the OSO was established about \$141 million in research grants and contracts have been awarded to Stanford faculty members that have used the services of the OSO in developing the outreach components of their proposals. Historically, about 90% of faculty who used the services of the OSO to develop their NSF Career Award proposals have received awards; it is too early in the cycle to know results for proposals submitted in July 2008.

While the OSO cannot claim credit for any of these awards, it is clear that we have been able to save faculty members valuable time and effort by quickly offering them ideas, partnerships, and programs in which they can participate.

\*A3:

We quantify by tracking research grants that have been awarded to the university. We have other ways to evaluate our actual programs. It would take a long time to describe those.

\*A4, A5:

No real problems, but it takes staff time to keep the website updated.

\*A6:

First we advertise it to faculty via meetings, newspaper articles in campus newspaper, etc. As we recruit teachers and HS students for various programs, we include our URL. We have also done a number of things to optimize the site so that it pops up at the front of search engines such as google. If you go to [www.google.com](http://www.google.com) and type in "science outreach" you will see our site comes up about 5t7h in a very long list of sites.

MIT outreach database からの回答

回答日 : 2009 年 2 月 20 日

回答者 : Ms. Amy Fitzgerald (The Edgerton Center, Outreach Coordinator)



Here's the story: MIT has offered a variety of K-12 Educational Outreach Programs for a great number of years. We do NOT have a central office or coordinator for these programs, rather individual departments or centers, or just individuals have chosen (or in some cases, have been mandated) to create some type of programming. There have been various efforts made to unite these disparate groups with only temporary successes. At one point 8-10 years back, an effort was made to try to gather at least the content descriptions and contact info for the various programs, and this information was put together in the form of a book. This book was also made available as a downloadable PDF, but unfortunately it was immediately outdated, and no funding was available for making updates. (Not even, I'm told, to the on-line PDF!)

Since that time, MIT welcomed a new president, one with an interest in our k-12 efforts. In a meeting between our president and a few dozen representatives of our outreach programs, the suggestion came up to create an on-line listing of our programs, which I posted a few years back. This listing evolved into smaller breakdowns of listings by School Year, Summer, Teacher opportunities and Student-run programs.

Our intention, stated at that meeting, was to also create a searchable database in association with the static listings. A student was hired to develop the database, working with suggestions from 3 members of the k-12 outreach community.

This database is populated not only by Educational, but also Community Outreach programs, as the hosting and funding is with our Public Service Center, which is not solely Educational. Sadly, a number of our k-12 members did not enter information about their programs into this database, declaring that it was "too complicated", or "would take too long". Some even asked me to enter their information, which I declined to do, not knowing enough about other programs to represent them well.

In terms of our website's effect on our University, I honestly doubt most students, staff or faculty have ever seen it! Our president has, and I believe she has referred others to it, but I would say that the primary use the site gets is as a response to teachers/ parents, etc. looking for particular types of programs, or programs for particular ages/ grades. If I am contacted about a type of program that I do not offer, I recommend that the person go look for themselves through our site.

### 3 結論

#### 3.1 ポータルサイトの評価

ポータルサイトはオープンして間もないため、ポータルサイトの反響や効果进行评估するには時期尚早ではあるが、現状での評価と今後の可能性を含めて考察する。

目的で述べた3つの課題にそって、それぞれの課題への効果进行评估する。

##### ・アウトリーチ活動への理解、支援の増大

現在のところ、学内での認知度は皆無に等しい。研究会開催の折に、学内広報誌で報告はしているが、特に反応はない。東京大学内の各教員や学生へのアウトリーチ活動の理解を高める前に、まずは、東京大学本部からのUtoIに対する理解や支援を得ることが必須である。現状では、UtoIは学生企画コンテストの一企画という扱いで、東京大学が主体的に取り組むかたちになっていない。

海外の事例を見てみると、Stanford大学の例がもっともうまくいっている。Stanford大学では専門のオフィスを立ち上げている。この立ち上げの経緯として重要になってくるのが、研究資金獲得のための教員への負担をへらすという目的意識である。目に見える数値目標があるからこそ、オフィスの存在価値も効果的に伝わり、学内でのオフィスの認知度は高いようである。一方、MITのケースはインタビューの結果から判断する限り、ホームページ立ち上げまで困難が続き、立ち上げ後も必ずしもStanford大学程にはうまくいっていないようである。学内での認知度も低い、というコメントもある。MITの実施形態は、中枢となるオフィスがなく、ポータルサイトの運営でつながっているというかたちになり、現在のUtoIにかなり近いと思われる。ただし、UtoIと異なる点は、Public Service Center がスポンサーについており、サイト運営への継続的な資金援助は確保できているようである。また、サイト立ち上げのきっかけとして、教育活動への理解のある学長が就任したことが大きかったようである。

以上のことから、アウトリーチ活動への理解、支援の増大のためには、まずは東京大学本部への理解増進が重要であり、最終的には専門のオフィスを立ち上げることが望ましい。そのためには、オフィスの存在価値を具体的に示すことができる数値目標の設定が課題となる。

##### ・学外への広報、調整の増強

こちらも現状では、サイト立ち上げ直後のため、学外での認知度は皆無に等しい。現在までにおこなった学外への広報活動は、プレスリリースのみである。サイトのviewerがいなければ、ポータルサイトの存在意味がなくなるため、サイトの告知は喫緊の課題である。まずは、東京大学のトップページや各UtoIパートナーのwebページからリンクを張ることで、インターネットで東京大学について検索している人を呼び込むことができ

ると考えている。また他の媒体から呼び込むことも大切である。媒体を選ぶ際には、ターゲットの設定が重要となる。本論でも述べたように、UtoIのポータルサイトは高校生およびその教員、保護者をメインターゲットとした。この設定は、海外の事例との比較からも適切であったといえる。例えば、Stanford大学も対象として就学前教育から中等教育までの学生とその教員（K-12 teachers and students）をあげており、さらにその中でも、回答6においては、高校生（HS students）とその教員を対象としてあげている。MITにおいてもK-12への教育プログラムを多く扱っていることが述べられ、また、ポータルサイトへの反応も教員や親に対するものが多いということが述べられている。今後は、高校の教員や親に効果的に伝わる媒体を利用した告知活動を進めていく必要がある。

#### ・ 学内連携の強化

3つの課題のうち唯一、既にある程度の効果が見られているのが、この項目であろう。ポータルサイト作成にあたって、UtoI研究会を3回実施しており、今まで顔をあわせることのなかった、アウトリーチ活動の実施者がお互いの顔を認識できるようになった。また、2008年のサイエンスアゴラにおいて、UtoI主催のシンポジウムを開催し、UtoIパートナーでもある理学系研究科、工学系研究科、地震研究所の各担当者にそれぞれの活動内容を紹介してもらった。これにより、同じ東京大学内のアウトリーチ活動でも実施目的や実施内容に多様性があることが明らかとなった（なお、UtoI設置までの経緯は2期生林洋平の修了論文に詳細が記述されている）。ただし、現状はそれぞれの存在を知り、活動状況を知り始めただけに過ぎず、今後はノウハウの共有や、リソースの共有などを進めていくことが望まれる。

### 3. 2 まとめ

本研究は、大学におけるアウトリーチ活動、特に東京大学におけるアウトリーチ活動をUtoIの活動を基にして分析した。その結果、3つの課題（理解・支援、学外広報、学内連携）を明らかにすることができた。そこで、その改善策として、東京大学内のアウトリーチ活動をまとめたイベントポータルサイトを作成した。さらに、そのポータルサイトを海外の先行事例と比較することによって、今後の改善策を提示した。この研究結果を活用しながら、今後もポータルサイトの継続・発展を目指し、東京大学のアウトリーチ活動の推進、さらには、日本の大学アウトリーチ活動の推進に貢献できることを願っている。

## 4 卷末記

### インタープリター養成プログラムによる影響、変化

本プログラムから得た最も大切なものは、受講生同士のつながりである。私は本プログラムへ応募する際の履修計画書で「授業内での学生同士のコミュニケーションがこのプログラムでは非常に重要である」ということを強く訴え、プログラム開始前から本プログラムの受講生に期待を持ってはいた。しかし、実際に参加してみると、その期待をはるかに上回るほどのユニークで、優秀で、熱く、骨のある人たちに出会うことができた。彼ら、彼女らによって、私は研究室に閉じこもっているだけでは決して得られない活力や広い視野を得ることができた。また、プログラムを通じて様々な現場に連れて行っていただいたことは、机上の知識とは違った、生身の感触としての体験を得ることにつながっている。人に出会い、現場に出向く、ということがコミュニケーションの根本であるということはこのプログラムから教えてもらったと言える。このプログラムを通して出会った受講生、講師の方々、その他全ての方々にこの場を借りて深く御礼申し上げたい。

### インタープリターとしての今後の抱負

私は本論文執筆時点で、博士課程2年に所属しており、来年度での博士号取得を目指している。博士号取得後にどのような職に就くのかは未定である。しかし、インタープリターとは役職ではなく役割であると私は考えているので、どのような職に就こうとインタープリターとして活躍できると信じている。プログラム修了後も、以前と変わりなく、様々な分野や人に興味を持ち続け、それらをつなぐ役割ができればと思っている。

2009年3月3日

加村啓一郎